

藤本 猛著

## 風流天子と「君主獨裁制」

——北宋徽宗朝政治史の研究——

久保田 和 男

最近、徽宗時代に關係する書畫を實見する機會に恵まれている。本書の冒頭にも、徽宗時代の都市繁盛を描いた「清明上河圖」が中國國外で初めて展示された展覽會「北京故宮博物院二〇〇選」（東京國立博物館、二〇一二年）の光景が言及されているが、二〇一四年の夏には、「臺北故宮博物院 神品至寶」と銘打たれた展覽會が同館で開催された。この展覽會では、「中國皇帝コレクシヨンの意味——書畫における復古と革新」という記念シンポジウム（七月五・六日）が行われ、藝術品を収集し、鑑定と整理に盡力した皇帝達の業績が中國美術史の傳統とともに比較検討された。徽宗は、コレクシヨンの方法論を確立した金の章宗や清の乾隆帝の先驅者として脚光を浴びている。秋には、徽宗（款）「桃鳩圖」をはじめとする室町將軍のコレクシヨンの系統的に展

示された（三井記念美術館「東山御物の美——足利將軍家の至寶——」）。義滿をはじめとする室町幕府の將軍たちが、宋畫を中心とする唐物収集に熱中し、その「展覽」が政治的な機能をもった事態が検討されるようになった。日本傳統文化の形成にも深い關係をもっていたことも知られるようになった。このような研究状況は、數年前に終了した學際的共同研究事業「東アジアの海域交流と日本傳統文化の形成」の成果とも考えられる。以上のように「徽宗」は文化史、文化交流史において非常に注目されている。そのなかで、本書は徽宗時代（一一〇〇～一二六）の政治上の意義に注目し検討した大作である。本評はまず内容を章節にしたがって紹介し、最後に若干のコメントを添え、責を塞ぐこととしたい。

## 二

本書は九章から構成される。

## 序 章

第一章 崇寧五年正月の政變——蔡京の第一次當國と對遼交

## 涉

第二章 妖人・張懷素の獄

第三章 政和封禪計劃の中止

第四章 徽宗朝の殿中省

第五章 北宋末の宣和殿——皇帝徽宗と學士蔡攸

第六章 宋代の轉對・輪對制度

第七章 「武臣の清要」——南宋孝宗朝の政治狀況と閣門舍人

## 終章

序章には、「君主獨裁制」の議論が簡潔に整理されたうえで本書全體の問題意識の出発点が明示される。「君主獨裁制」という宋代に始まる政治構造の分析形態は、内藤湖南氏が唐宋變革の政治上の特徴としたのを受けて、宮崎市定氏が實證的に多面的に論じ定説となった。それに對する論點の補強ないし修正する研究は、宋代政治史の一つのトピックといえる。「君主獨裁制」とは、皇帝個人が政治的な個性を發揮する政治形態ではなく、官僚士大夫の議論を経た政策を、最終的に皇帝が決濟をするという政治形態・皇帝制度を示す。皇帝機關説と比喩的にいわれているように皇帝には政治的な主體性はない。しかるに著者は、皇帝の政治的な主體性が王安石引退後の神宗皇帝親政の時代に大きく變化したことを指摘した熊本崇氏の研究に注目する。神宗の「親政」時期において、三省などの議論を経ずに皇帝が発出可能な命令文書である「内降手詔」が用いらればはじめ、徽宗は「御筆手詔」としてそれを繼承した。著者は、御筆手詔についての徳永洋介氏の論文に依據しながら、「君主獨裁制」の新しい展開「親政」（專制君主）出現を考える。問題となるのが、宰相蔡京の御筆手詔への關わりである。「蔡京は、皇帝から出される御筆が自らの思惑と乖離してゆかぬよう、うまく制御していかざるをえなくなったのではなからうか。」（本書二三頁）と慎重に表現されているが、徽宗・蔡京の間には協調關係とともに「親政體制」を確立する過程においては對立關係が生じたことを示唆する。本書はこの政治過程を検討する作業といえる。

第一章では、徽宗即位當初の崇寧年間（一一二〇—一一二六）の政治史が再検討される。建中靖國と改元（一一〇一）し中道路線を指向したのは徽宗本人であり向皇太后の垂簾聽政の後であることが通説に對する批判として言及される。中道路線を擔う宰相として登用されたのが曾布であったが、「徽宗の心變わり」（本書四九頁）により、よりラディカルに新法政治を志向する蔡京が登用される。宰相を選ぶ存在としての徽宗の主體性が強調される。期待に應えて蔡京により新法政治が推進されるが、崇寧五年（一一〇六）の彗星出現に直面した徽宗は「元祐黨籍碑」破壊を命じ新法政策を中止し、蔡京は宰相から罷免される。（崇寧五年正月の政變）。著者は、従来の論者が「星變に動搖する徽宗」として政變の主要な要因を徽宗の「氣まぐれ」に求めたとして批判し、對外關係における皇帝徽宗と宰相蔡京の路線對立が政變の主因であると論じる。「澶淵體制」を守ろうとする徽宗に對し、西夏との紛争を優勢のうちに處理しつつあった蔡京は、遼との間においても強硬策に轉じる動きを見せていた。蔡京が失脚するとかわって趙挺之が宰相となり、徽宗の意向にそった外交政策に改められる。ただし「元祐黨籍碑」をめぐる兩者の意見對立があり、この政局に影響したことはふれない。外交に關する史料を丹念に追跡して、當時の状況を復元しているが、政變についての「客觀的」な説明はその面からの接近も必要なのではないか。また、著者が後景に追いやろうとしている天人相關的な論理も當時としてはそれなりのリアリティをもっていたと思われる。この問題については後述したい。

このまま徽宗は「紹述」路線を放棄したわけではなく、大觀元

年(一一〇七)正月には蔡京を宰相に復歸させる。第二章は、同年五月に發生した「張懷素の獄」を分析の對象とし、第二次蔡京政権との關係を考える。この事件は、「妖人」と『宋史』で表現される張懷素なる在野の人物による謀反事件であるが、従犯は士大夫を筆頭にして廣範にわたっており、蔡京と對立していた弟蔡卞なども關係者として處罰されている。張懷素を告發した人物は、蔡京追い落しの一つの手段としてこの獄を起こしたというが、蔡京は一黨に訟獄を委ねる事に成功し、張懷素と蔡京の親密さを裏附ける書簡類は焼却され、逆に蔡京のライバルである呂惠卿や弟蔡卞が處罰される。本章では蔡京の政治力がきわめて大きかったことが實證的に明らかにされ興味深い。その一方で徽宗の訟獄に對するはつきりとした見解や發言などは取り上げられていない。ただし著者は、本章最後に、これらの訟獄において、徽宗と蔡京の意見の相違が決定的になつたとし、徽宗と蔡京の對立という本書本來の論旨に本章を位置づけようとする。

第三章は、蔡京派によつて準備されていた封禪儀禮が政和六年(一一一六)に突然中止された問題を取り上げる。小島毅氏は、徽宗朝は經書に基づく祭祀體系の確立が圖られた朱子學的禮制への過渡期であり、天帝からの受命に重きを置く王權論理から天理を秩序理念として根幹に据える政治思想に移行する搖らぎの時代であつたという。著者はこのマクロな政治文化史の變遷に賛意をしめしつつ、ミクロな徽宗朝政治史の問題として封禪計劃を考察する。封禪計劃は大觀政和年間(一一〇七—一八)に企てられたもので、京東路(現山東省)の民衆達により封禪實施をもとめる請願が行われるところから始まる。庶民による自發的な行爲では

なく、京東路の地方官が獎勵したものでありその背景に蔡京がいたという。著者は、第一章を敷衍して封禪中止決定における徽宗と蔡京の權力抗争を禮制上の意見對立から確認してゆく。蔡京不在時に『政和五禮新儀』を編纂するために設置されたのが議禮局であつた。政和三年(一一一三)復職した蔡京は議禮局を廢止、もともと私的な機關であつた禮制局において封禪の準備として禮器製造を行う。前の議禮局は、徽宗・鄭居中がその擔い手であつた。著者は、この三人の政治的對抗關係によつて封禪の急な中止との關聯を主張する。小島毅氏によると、徽宗は『周禮』に基づくような三代(夏殷周)の禮制の復活を理想と考えていたという。著者はこれに對し(徽宗から見ると)蔡京が重視したのは、漢唐の緯書的な禮制であつた點を強調する。たとえば徽宗が經書にもとづく九鼎を重視したのに對し、秦漢以來傳來されたと蔡京が鑑定した傳國寶は實際に用いないという態度に對比が見られるとする。<sup>(3)</sup>

蔡條「鐵圍山叢談」には、政和三、四年ごろ、徽宗が「權綱を攬り、諸を大臣に付するを欲せず」とある。また、「御筆」による政治も本格化してくる。著者は、この徽宗の「親政」意志に對抗して蔡京が主導し政治的な實行力を徽宗にアピールするための封禪計劃であり、したがつて政和六年、反蔡京の立場をとつていた劉正夫の意見を徽宗が採用し封禪を中止した事は、徽宗の「蔡京體制」からの訣別と徽宗「親政」確立を意味しているという。このような「事件」の一方で、政和年間には道教を利用した徽宗權力の強化が行われている。このような動きも皇帝「親政」體制確立のためであり、「君主獨裁制」から皇帝「親政」に向かう轉

換点であったという。徽宗時代における「君主獨裁制」の變質の解析という本書の論述目的において重要な一章といえよう。ただし、第二章と第三章で取り上げられた政治的な事件は本書のなかでも言及されているように、史料によって内容や関係者の意圖などが十分にわからないようである。政治的な對立關係や裏切りといった政治的なネットワークの活潑な揺らぎのみが詳述される。

第四章は、『書論』に掲載された「徽宗「蔡行敕」考」と「宋代の殿中省」の二論文を、前後の二節に改編し一章としたものである。殿中省は徽宗時代だけ設置されていた官廳であり、それだけに徽宗時代の政治文化の特色と關聯する。蔡行は、蔡京の孫（蔡攸の長子）で殿中省を管轄する職（領殿中省事・殿中監）の任に長くあつた人物である。

「蔡行敕」は遼寧省博物館所藏の徽宗眞跡とされる書跡である。内容は殿中監辭任を申し出た蔡行を慰留するものである。中村裕一氏は、これは、宋代の詔書の形式に符合することからして、詔書の起草過程を経て最終的に中書省の令史・書令史らによって謄寫されたものであり、徽宗の宸筆とは考えられないとする。それに對し著者は御筆手詔であるという可能性を追究する。作品傳來の過程を題跋・所藏印によって追跡し、それから押印されている印璽の意味を探る。蔡行敕には、「御書之寶」という印璽が捺されている。この印璽が本物であるという前提の上で、宋明にわたる多數の關聯史料を博搜し精密な考察が展開する。その結果、印璽は皇帝の宸筆あるいは、皇帝の宸筆が部分的に含まれている書にのみ用いられているとし、蔡行敕が徽宗の手（あるいは徽宗によって指導をうけた女官）によるものであることを實證的に解き

あかす。最後に文書形式に對する中村裕一氏の疑問を退けこれが徽宗の御筆手詔であると斷ずる。

殿中省は崇寧二年（一一〇三）に神宗の遺志によるものと稱して蔡京が設立を推進した新設の官廳であり、六尚局を管轄し皇帝の日常生活に奉仕する。殿中監には文官が任じられ、宦官勢力を押しやることもなったが、蔡京の親族が就任するばあいが多く、特に蔡行の任期が非常に長かった。したがって蔡京が深く禁中に介入するために殿中省を作つたという結論が導かれ、蔡京體制が徽宗の日常生活に密着したものと描寫されている。

前章までは、蔡京と徽宗の微妙な對立關係、徽宗の蔡京權力からの脱皮が丁寧に語られていたのであるが、本章は蔡京と徽宗の深い關わりをしめす殿中省についての論證が多様な史料を通じて行われる。皇帝權力と殿中省・殿中監との關係が最後まで示されず、これまで著者の通説批判に引き込まれていた讀者は戸惑いを感ずるかもしれない。

第五章は宣和七年（一一二五）、金軍の南下が報ぜられるなかで徽宗がなかば強引に皇太子（欽宗）に内禪を受け入れさせる場面から始まる。その舞臺となつた政治空間が宣和殿である。開封大内最奥の皇帝の私的ともいえる空間であつた。そのような場所で、禪讓という公的な政治過程が行われたことに徽宗政治の特色を著者が見る。本章は、特に宣和殿の館職に長く任ぜられていた蔡攸に注目して検討される。

第一節「宣和殿と保和殿」では、宣和殿や保和殿、延福宮などの關係やその建設様式などが明らかにされる。複雑な史料操作を経て、廣い意味での宣和殿の中に、宣和殿と保和新殿が存在する

という解釋が導かれ、保和殿（延福宮の跡地に建設）とは別の區劃として圖示されて理解が容易である。

禪讓の舞臺となった宣和殿は、書畫骨董の陳列館としての役割をもっていた。先に紹介した臺灣故宮展（二〇一四年）の展示室も宣和殿をイメージした（東京國立博物館のブログ参照）とされており、書畫、青磁、印璽などが潇洒な雰圍氣の中で配置されている。このように宣和殿は、徽宗が自由に自らの嗜好を羽ばたかせる空間であった。一方で次第に政治的な舞臺としての機能も帯びていった。御筆手詔の發信據點ともなり内夫人や宦官による代筆によって作成され、蔡京にも制御できなくなっていたという。宦官の梁師成が文才により寵愛を得て「隱相」と稱せられるに至るのもこのためである。

政和五年（一一一五）に宣和殿學士が設置される。最初の學士となったのが蔡京の長子蔡攸であった。この學士は蔡京一族やその一黨と密接に結びついており、他の館職とは大きく異なる性格を有する。特に、他の館職は名譽職であり殿名はその優遇の象徴に過ぎなかったが、宣和殿學士は實際に宣和殿に出入する。したがって蔡京一族、蔡攸や蔡條は徽宗の傍らにあって徽宗の動向を伺える立場にあった。特に蔡攸が宣和殿學士・大學士に就任している期間は長く徽宗との特別な結びつきが指摘される。このように蔡京は自らの骨肉を徽宗の側近とすることによって十五年間にわたり政權を維持したという論及（本書三一六頁）は注目される一方で、蔡京と徽宗との關係を對立關係として捉えた前半の記述とどのような關係になるのか本章においては説明が不足しているように感じた。

蔡攸は徽宗が即位するまえに徽宗の知遇を得ており、蔡京のそれより早かったことが明らかにされる。ほぼ徽宗と同年代であった蔡攸は機轉の早さから徽宗の寵愛をうけた。宣和七年（一一二五）の讓位劇においても、蔡攸はその脚本作りに関わっていた。徽宗の「傳位東宮」というメモを首相が受け取りを拒んだ際、受け取って翰林學士（吳敏・李綱）に渡す役割を演じたのも樞密副使として執政の列に聯なっていた蔡攸であった。三人は事前に徽宗とこの讓位劇を仕組んでいたという。

北宋開封大内の北半部は、皇帝の私的な空間と一般的には考えられている。その東部にあたる部分は殿中省として、蔡攸の長子蔡行が長官を務める空間であつて徽宗の生活物資を調整する役割を擔う。西部は、宣和殿を中心とする徽宗の私的な空間である。本章で述べられてきたように、徽宗時代の文化藝術の中心的な役割を擔った所であり、美術史においても注目される空間である。そして蔡京の長子蔡攸が宣和殿學士として長期にわたり密接に関わりをもつた政治空間であった。政治史の書である本書の眼目はこちらの側面に注目している。

政治構造を空間という視座から解明する方法論が平田茂樹氏によって提起されて久しい。第四、第五章はその成果として貴重な業績といえる。徽宗と蔡家一族は、宣和殿・殿中省以外の空間においても様々な形で深く結合していたことを拙稿で論じたことがある。たとえば、蔡京は徽宗から舊城大梁門外の一族の邸宅が周圍を賜第されるといふ榮譽を被り蔡攸・蔡條など一族の邸宅が周圍に林立した。「蔡太師宅」<sup>6</sup>と大内とは、運河（景龍江）や複道によって結びつけられており、徽宗はたびたび行幸を隱密裏に行つ

ている。本章により蔡攸・蔡行が徽宗の私的空間において存在感を増したことで蔡京政権が持續したことが明らかになったのは一つの成果であるが、一方で徽宗自身も蔡家の私的空間に入り込んでいたことと對比して論じてさらに政治空間論を通じての徽宗時代解明が深まると感じた。首都開封の都城空間の構造再編が徽宗と蔡家の結合という面から解釋可能なのである。

第六章・第七章は徽宗時代から離れて南宋の政治制度が検討の対象となる。第六章では、北宋・南宋を通じて行われた轉對・輪對という政治の「場」が検討の対象である。著者は、輪對が南宋時代にとくに勵行されたことに注目し、それを通して南宋政治史の特徴を明らかにしようとする。輪對とは、「日輪一人轉對」や「輪當面對」などの特殊な轉對を意味し、南宋では参加者の範囲が廣くなりほぼ毎日行われ三年で一巡した。南宋孝宗はこれを中央官僚に對する人物鑑定の場として活用する。不遇な官僚にとっては自己を皇帝あるいは官僚世界にアピールする機会となった。

頻繁に皇帝と官僚が面談することが可能な輪對が、南宋になって確立してきた要因として、著者は北宋末における皇帝權威の失墜を南宋で挽回することが求められていたとする。特に南宋になって轉對から明確に分離したという点から輪對を考察し、その政治的な役割を制度的な分析とともに、實際の實施狀況などを逐一考察の俎上に載せるなど理解しやすい。

第七章では、南宋二代目孝宗の治世の特徴を側近體制の構築として捉え、その形成を政治狀況のなかから考えてゆく。孝宗乾道六年（一一七〇）に設置された「閤門舍人」という武臣（文階を持たない官僚カテゴリー）の官職をこの時期の政治體制を象徴す

るものとして注目する。孝宗朝には、武官優遇政策が取られる一方、宗室や恩蔭など科擧出身者以外の官僚の積極的な登用が見られる。孝宗自身が、科擧の成績がその後の昇進に影響を与えることに對して不満を表明している。皇帝自身の人物鑑定によって才能を発見して登用しようという孝宗の姿勢は、それまでの宋朝の「君主獨裁體制」とは別のものであると指摘する。士大夫の清談の風が流行しており財務關係の實務を忌避する傾向に、孝宗が苦しんでいたことに言及し、「科擧士大夫」以外から積極的に人材活用を行い「親政」體制の構築を目指していたと推測する。それは宰相權限の制限と御筆政治の展開により實現していた。兩宋を通じて宰相が不在だった期間が六年半であり、そのうち、四年半が孝宗朝のものであるという數字には説得力がある。宰相・執政らを差し置いて、御筆・輪對を積極的に活用した孝宗は政治の實權を掌握し「皇帝親政體制」が構築されていたという。ここで前章に輪對が一章を割いて論じられた問題意識が理解されてくる。

もともと閤職は武臣の名譽稱號であり、文臣の館職に近い性質であったが濫發による地位低下が発生していた。そのような前史を受けて設置された閤門舍人は定員十人で、武舉合格者であること、召試の合格者であることが求められたが、輪對への参加や二年後の知州任用の特権があたえられ、孝宗の親政體制においてはそれを擔う御筆を傳達する役割を擔當していた。閤門舍人の特色を著者は「側近性」という言葉で表現している。士大夫政治や宰相專權と一線を劃す孝宗の專權體制に必要なものが側近集團だった。側近の登用に公平性を擔保するために、「武臣の清要」と認識されるような教養を身につけた閤門舍人が設置された事情

が本章で明らかにされる。孝宗がきわめて優れた君主であったことが印象附けられる一方で、その後の南宋の政治が皇帝の資質の如何に左右され、「親政」によって高まった皇帝権を利用した側近出身の専権宰相が次々と現れるという政治構造史の見通しが得られることになった。

### 三

以上、本書の内容を紹介してきた。重厚な書籍を通讀した上で得られた新知見は多いといえよう。ただし既出の論文をまとめて一書とした本書のような専門書に良くあることであるが、章と章との關聯が必ずしもしつくりとしていない讀後感があった。たとえば南宋孝宗朝の政治制度をテーマとした第六章と第七章は、著者の主張する徽宗政治の特徴・側近政治という觀點から徽宗時代と結びつけて本書の中に位置づけられている。ただし副題に従い徽宗時代の政治史の體系的な敘述を期待して本書を手にとった讀者には違和感があるかもしれない。近刊ではあるが楊小敏氏の『蔡京、蔡下與北宋晚期政局研究』（中國社會科學出版社、二〇一二年）があり、比較的體系的に徽宗時代の政治史・政治運営について論じている。徽宗の權力強化という本書が扱った問題についての見解も述べられている（總論部）。本書においては該書への言及がない。今後の徽宗時代史研究においては併せ参照されるべきであろう。さて、書評を締めくくるために本書の描き出そうとした徽宗の「君主獨裁制」や政治史についても若干コメントしておきたい。

「君主獨裁制」論は「皇帝機關説」とも表現されるような、士

大夫と共治の政治制度であり皇帝の恣意的な政治的意志は抑制される近世的な君主制度として本書では紹介されている。したがって、この議論のもとでは、専権をふるった明の洪武帝や永樂帝などの君主は一過性の例外的なものとする（本書一〇頁）。それに對し本書は皇帝親政を再評價する試みであり、元豐時代の神宗が能動的な「親政」を行った君主であり、徽宗は父神宗が行っていた「親政」を繼承發展（紹述）したとする。「君主獨裁制」論の制度的なバリエーションとして徽宗の「親政」（専制君主政）を位置づけようとする。つまり、「君主獨裁制」という「宋代近世論」の柱ともいべき論理の中で、その原理と矛盾する「主體的な君主」を「古代的な専制君主」として例外的に扱うのではなく、近世君主の一類形として肯定的に評價しようとする。すなわち本書は、「宋代近世論」を修正強化することを目的としている。

王瑞來氏は、宋朝建國から皇帝權力は象徴化して減少し、權威は逆に上昇するという見通しを述べ、「君主獨裁制」論に對して眞つ向から反對している。本書はむしろん王氏の説をとらず、神宗や徽宗によって親政が指向され、それが官制改革や御筆手詔の發展により、皇帝の持つ權力が北宋末期になるに従って上昇するとする。ところで、本書が掲げる政治史は皇帝權力の研究である（本書「あとがき」）。王氏のように皇帝權威の構築と權力闘争をあわせて論じることは考えられていないようだ。ここが評者が疑念をもっているところである。本書にとまらず、「宋代近世論」Ⅱ「君主獨裁制」論に權力構造の分析はあるが、權威の構築に關する問題意識があまりない。權威の問題にかかわると、祥瑞や天書・天神などの神秘性の高い非近世的な要素がどうしても検討

の視野に入ってくる。「宋代近世論」が参照枠にいれるのはせいぜい儒教の禮制までである。本書第一章では、外交政策の穩當な判断を行った徽宗が外交對立を演出する蔡京を押さえたことが政變の理由とされ、彗星の出現という「星變」に大慌てになったという従來の見解を表面的であるとして批判する。第三章では、封禪を中止させ「老宰相」を引退に向かわせる賢君として徽宗が登場する。そこには「古代的な呪術政治」を超克した近世的な君主像が投影される。

三代目の眞宗は、天書の權威を利用して澶淵の盟により傷ついた皇帝權威の回復を図ろうとする。寇準をはじめ宰相たちは、眞宗の意向を汲んで天書や祥瑞に心ならずのめり込んでいった。そして史上最後の封禪は實行される。これは神聖王としての王權であり、それを望む皇帝の意志が政治に色濃く反映したいわば「親政」である。このような事態を押さえ王朝の歴史的な記憶の中から望ましいとされる宋代の皇帝像が「祖宗の制」として少年皇帝仁宗を教育する士人達によって集團的に合理的に形成された。古代的な天書や祥瑞などは宋學によって否定された漢唐儒學の産物として否定することが當時の士大夫の言説には頻繁に現れる。そのような遷移は宋代近世論には格好である。祥瑞の出現報告も減少する（神宗時代、「芝草」發生の報告は三七件のみ）<sup>10</sup>。「神聖王から哲人王」という王權論上の推移であり、聖人としての道徳性をそなえ士大夫官僚とも共通の儒學の價值觀を所有して共治するという近世的皇帝像の形成となる。

本書においても、政和年間の徽宗は、實權を掌握しながら新儒學による新禮制の編纂を目指した「哲人王」と印象づけられ、

「漢唐以來の祥瑞や緯書の要素を重視する」古い儒教儀禮に固執する老宰相蔡京という對比が主張される（本書一五九頁・一六八頁・四七二頁など）。しかし、徽宗時代には祥瑞の報告がたくさんあったことが史書からは明らかである。徽宗は即位當初から祥瑞を見るための行幸を行い、諫官から「皇帝が芝草を好むことがわかると、天下の人々が芝草を献上することに狂奔するようになる」という批判を受けている<sup>11</sup>。これは蔡京が宰相になる以前の事件であり、徽宗のパーソナルな傾向であると考えられる。板倉聖哲氏が多くの例をあげて的確に指摘しているように、徽宗は爲政者として儀禮改革を進めるとともに、祥瑞を熱心に求め続けた<sup>14</sup>。祥瑞の圖をあつめて『宣和睿覽冊』にまとめ、しかも、そのうち一枚とも考えられているのが本書の表紙を飾る『瑞鶴圖』なのである。天神降下の演出もたびたび行われた。現象的には古代的な神聖王・呪術王を装った權威強化の手段といえよう。ただ単に神宗政治を紹述することとは違う徽宗獨特の政治文化なのである。本書では表面的なものと退けられているようだが、それは星變に徽宗が敏感に對應し政變に發展する政局が繰り返されたこととも關聯している<sup>12</sup>と考える。

蔡京は徽宗にとって「呪術的」權威の確立に必要な首都の大規模土木工事のためには不可缺の存在であった。蔡京が野にあったとき徽宗が登用した宰相たちが口にした財源「不足」を蔡京はいわなかったといわれている。したがって、徽宗は蔡京の政策や政治姿勢に時に疑問をもったとしても復活させたのである。徽宗と蔡京の對立を強調しようとするあまり、艮嶽や明堂の建設など徽宗・蔡京の共同事業に對し本書は沈黙する。明堂が竣工したのが



政和七年（一一一七）である。一方両者が訣別した結果であると本書が強調する封禪の中止はこの前年なのである。この時期は徽宗が道教神霄派への傾斜を強めた時期でもある。政和五年に蔡京の仲介で林靈素は徽宗に面會し、彼のために上清寶籙宮が建造される。その北隣りに神霄が降下する空間として萬歲山（長嶽）が造營されるが、それは政和七年にとりあえず完成している（『宋史』卷八五、地理志、京城）。

確かに生理的には蔡京は老い徽宗は壯年となる。皇帝としての經驗値を高め、主導権を握ることが増した可能性は高い。政和初年（一一一一）、「不豫」となった三十歳の徽宗は道教神を夢に見る。杭州に左遷されていた蔡京はその機會を利用して神霄派の道士林靈素を携えて復活する<sup>16</sup>。それが徽宗と蔡京の新しい結びつきだったのかもしれない。この政局ではすでに主導権が徽宗にあったといえよう。即位してから十八年が経過した政和七年（一一一七）四月に徽宗は神霄派の教説に基づき臣下によって「教主道君皇帝」に冊立された。傍流から即位した徽宗は權威のソースとして「紹述」を掲げていたのだが、ここで、父神宗の影を振り拂って独自の神聖王としての權威を確立したといえよう。この道教的政策について、本書は一六八頁で一行だけ控えめに言及されているが、封禪中止より明白な皇帝權の劃期なのではないだろうか。また、宣和二年（一一二〇）<sup>18</sup>的林靈素の追放や蔡攸と蔡條の對立などの問題から蔡京が致仕するが、この複雑な政治過程を本書は分析してほしかった。徽宗の蔡京體制からの脱皮というものがあるとすれば、最終段階といえるからである。

以上、本書は徽宗をめぐる論著としてみると、權威の確立や神

聖王への指向という問題意識が足りないのではないかという私見からコメントを書かせていただいた。多様なことが特色といえる徽宗像をやや嚴格に「君主獨裁制」という一つの史觀に押し込んでいるという讀後感があつたからである。特定の問題意識を出発点として歴史の再構成をおこなう現代歴史學の専門書であるので當然のことかもしれないが、一般の讀者は注意すべきであろう。

#### 四

本書は、「風流天子徽宗」ブームのなかで政治家徽宗を政治史・政治制度史の面から腰を据えて追究した勞作といえる。「君主獨裁制」のバリエーションあるいは進化としての徽宗親政確立の問題を論じ、藝術にのみ優れた政治的に無能な風流天子という巷間いわれる徽宗の再評價に勉める。その試みにおいては指摘してきたように残された疑念もある。本書を里程碑として新たな研究史が再び紡ぎ出されてゆくことにならう。徽宗時代は、『長編』が脱落しており、また、残された史料も南宋時代に黨派的なバイアスがかけられた史料である。そのような状況を意識し（本書二頁）丁寧な史料批判を行いながら零細な史料まで丹念に拾い上げ、時に推理を交えて歴史的事實を再構成しようとする姿勢は評價されよう。とくに宣和殿など徽宗の藝術世界の空間構造を制度史の面から明らかにしたことは、美術史研究者からも注目されている<sup>19</sup>。自分自身は本書を得て多くの研究上の示唆を受けたことを深謝する。以上拙評は無辭を聯ねてきた。日頃の不勉強ゆえの誤讀や誤解をふくむと思われるが、著者ならびに讀者諸賢のご海容をお願

## 註

- (1) 既出の書評として小林義廣「新たな視点で徽宗朝の政治を讀み解く」『風流天子と「君主獨裁制」北宋徽宗朝政治史の研究』(『東方』四〇八、二〇一五年二月)がある。
- (2) 王瑞來「宋代の皇帝權力と士大夫政治」汲古書院、二〇〇一年、六六頁。
- (3) ただし九鼎の製造にも蔡京は最初から深く関わっており「定鼎禮儀使」になっている。
- (4) 塚本麿充「徽宗のコレクシヨン」(東京國立博物館・九州國立博物館特別展圖録『臺灣故宮博物院 神品至寶』二〇一四年、一一〇頁)を参照されたい。
- (5) 拙稿『宋代開封の研究』汲古書院、二〇〇七年。
- (6) 『東京夢華錄』卷三
- (7) 王氏前掲書。
- (8) クリスチャン・ラムルー(高津孝譯)「宋代宮廷の風景——歴史著作と政治空間の創出(二〇二二～二〇四〇)』『東方學』一一三輯、二〇〇七年。
- (9) 拙稿「玉清昭應宮の建造とその炎上——宋眞宗から仁宗(劉太后)時代の政治文化の變化によせて——」『都市文化研究』一二號、二〇一〇年。
- (10) 『文獻通考』卷二九九、物異五 芝草 朱草。
- (11) 小島毅「中國の歴史07 中國思想と宗教の奔流 宋朝」講談社、二〇〇五年、二〇七頁。
- (12) 『文獻通考』卷二九九、物異五 芝草 朱草。
- (13) 『九朝備要』卷二五、元符三年九月「幸龍德宮觀芝」の陳確上奏を参照。
- (14) 板倉聖哲「皇帝の眼差し 徽宗「瑞鶴圖卷」をめぐる」『アジア遊學』六四、二〇〇四年。
- (15) 楊小敏「蔡京、蔡卞與北宋晚期政局研究」中國社會科學出版社、二〇一二年、一六五頁。眞宗朝において玉清昭應宮の建設に財政的能力ふるって實現し權力をにぎった丁謂に對比すべきであろう。王氏前掲書、三五二頁を参照。
- (16) 阿部肇一「北宋末の法黨と佛教・道教」『日中語文交渉史論叢・渡邊三男博士古稀記念』櫻楓社、一九七九年。
- (17) 蔡條「史補」(『資治通鑑長編紀事本末』卷一二七、道學、大觀二年五月辛亥の注)
- (18) 拙稿「北宋徽宗時代と首都開封」『東洋史研究』六三卷四號、二〇〇五年。
- (19) 塚本麿充「清明上河圖」の魅力——「清明上河圖卷」と宋代の視覚文化」東京國立博物館特別展圖録「特別展北京故宮博物院二〇〇選」二〇一二年、一五九頁下段。
- 二〇一四年三月 京都 京都大學學術出版會  
A 五判 八十五一〇頁 七二〇〇圓十税